

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第52号 2019年4月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 桜と学校	堤 ひろゆき	2
逸話と世評で綴る女子教育史(52) 女性の洋装と束髪の流れ	神辺 靖光	4
山口高等商業学校校長岡本一郎の教育方針について 鍛錬強調・読書奨励・実業研究の推進	谷本 宗生	9
明治後期に興った女子の専門学校(7) 文学作品から見る明治女学校	長本 裕子	12
教育史研究の周辺⑩ 学校を経由した社会移動研究(再生産戦略編③)	加藤 善子	16
カレッジノベルの研究への道(4) :アメリカの研究に見るカレッジノベル(3)	吉野 剛弘	19
「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で 「カリキュラム・マネジメント」を教える試み(5)	富岡 勝	23
我流・文献紹介(13) 高等学校新学習指導要領をもたらしたもの	神辺 靖光	30
「ニューズレター・コロキウム」打ち合わせ (2019年3月17日)の記録概要	加藤 雄大	35
刊行要項(2015年6月15日現在)		37
短評・文献紹介		38
会員消息		41

コラム 桜と学校

つみ
堤 ひろゆき
(上武大学)

春は出会いと別れの季節である。筆者の勤務校でも3月には4年間の学びを修めた学生を見送り、先日はあらたに学ぼうとする学生を迎えたばかりである。

入学式や卒業式では、桜の花、特に

ソメイヨシノがメディア上ではよく取り上げられる。明確に因果関係を指摘するのは困難だが、この見慣れた光景を例にとり、歴史を実践することについて考えるきっかけとしたい。

桜と入学式・卒業式が繋がってイメージされるためには、両者が同じ時期に存在する必要がある。基本的に桜は春に咲くものである。日本の学校が4月始まりになったのは、1880年代後半1890年代以降である。理由としてはいくつか説があるが、1887年の徴兵令の改正にともなって、徴兵検査での年齢査定基準が4月現在に変更されたことが有力とされている。当時は中等諸学校への入学者の年齢が現在と比べて高く、徴兵適齢とほぼ同一であったため、学校が9月始まりなどだと、学校が求める人材が軍に流れてしまうおそれがあった。このことから、初等中等教育では、高等教育に先んじて4月始まりとなった。

一方で、ソメイヨシノが日本中に広まるのは日清戦争日露戦争の後である。ソメイヨシノは生育が早く、咲き方も特徴がある。1900年代後半以降から、記念碑や新しい施設の近くに植えられた。学校も例外ではない。ソメイヨシノは、新学年のはじめを飾ると同時に、夏には日陰を作り、冬には日差しを提供するという効果もあって、日本全国の学校に広まっていったと考えられる。

ここで重要なのは、ソメイヨシノが広がったということである。ソメイヨシノは、同一の木から分けて作られたために、同一条件であればほとんど同時に花をつけて、ほとんど同時に散る。そのため、桜前線というものが可能になるのであるが、これは、ソメイヨシノのあるところでは、似たような光景が広がっていると、人々が容易に想像することができるということである。

さらに、近代教育システムは、その範囲において均質であることを求める。学校というシステムは桜の光景という想像と結びついたものとして、相補的な面をもちながらパラレルに展開していったといえる。同じ学校システムを経験しているならば、同じような春を経験しているだろう、と想像するのである。実際には、地域によって差があるために入学式や卒業式に桜が咲いているとは限らない。にもかかわらず、入学式や卒業式と桜がイメージとしてつながるのは、メディアを通じて情報が共有されることによって可能になる。

メディア、特にマスメディアにおいて桜と入学式・卒業式のイメージがどのように扱われてきたのかという点に踏み込むつもりはない。しかしながら、そこからわかるのは、ソメイヨシノが日本中に咲いていることも、入学式・卒業式のイメージと結びついているのも、自明のことではないということである。自明でないというだけでなく、そうしたイメージが教育・学習を規定することになりうるということがむしろ重要なことである。たとえば、大学を9月始まりにするか否かが取り上げられたとき、桜を持ち出して反対する人がいたように記憶する。もちろん、他の社会的な要因が教育を規定し、学習を規定することも忘れてはならない。

私たち自身も教育を受けることで身に付けた枠組みで桜をはじめとする様々なものごとを見ている。当然のことながら、これまで生きてきた人が見た桜や、これから生きていく人が見ていく桜とは異なる見方をしているだろう。その異なる見方とは何であるか。同一の見方をすることはできないとしても、史資料に基づいて想像し、思いを馳せること。見慣れたものに改めて注目し問い直すことは、過去のみならず現在を理解するためにも他者を理解するためにも必要な態度であり、歴史を実践する際の醍醐味だということを再度胸に刻みたい。

参考文献：佐藤俊樹『桜が創った「日本」—ソメイヨシノ 起源への旅—』
(岩波新書、2005年)

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(52)

—女性の洋装と束髪の流れ—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

宮中の奥から出御して国家の式典、国民の儀式に姿を現わした皇后、社交界で動きまわる総理大臣夫人、西洋上流社会の紳士に嫁ぐ東京の町娘、男が独占した舞台や高座に、男どもをかき分けて登場する女優たち、このように大奥や家の中でのみに生活した女性(ゆえに奥様とか家内という)が街頭に、民衆の前に姿を現したのが、明治中期の現象である。鹿鳴館時代の洋装婦人にみられるように、これらの現象には明治初年以来の洋化思想があった。

明治政権を打ち立てた西南諸藩の幕末の志士たちは、口に尊王攘夷・王政復古を唱えながらも戊辰戦争の頃には西洋文明の信奉者になっていた。幕末の争乱の中で、西洋列強の軍事力、科学技術力に手痛い目に会っていたからである。よって政権を握った直後から尊王攘夷のスローガンを文明開化に切りかえ、ひたすら西洋化の道をひた走った。それは高度な学問、教育、制度等全般に及ぶが、手取り早いのは服装を西洋化してしまうことである。まず政府の高級官僚に洋服を着させ、漸次、地方官僚、軍人、警察官、郵便配達に及んだ。若い明治天皇は無邪気にも薦められたプロシヤ式軍服が気に入られ、終生これを愛用した。軍隊の兵士全員に軍服を着させることは大変なことであった。一口に洋装と言っても上衣にズボン、シャツに股下、靴に靴下、帽子まで揃えねばならない。明治10年代に発展した紡績業と洋裁職人の養成、製靴業と靴職人の養成と活躍があつて、明治21年、師団制ができる頃には全兵士に軍服が行き渡った。鹿鳴館時代に女性の洋装が流行したのは男性の洋装が一応満ちて、その波が女性にも及んだからである。

明治16年に鹿鳴館が完成すると早速、舞踏会が始まった。この洋式舞踏会はこれまでの日本にはない形式である。男性はすでに正装化されたフロックコートに靴でよいが、女性は正装である^{うちかけ}裃でも困るし、和服で下駄では踊れない。そこで洋装となった。女性の洋装は開

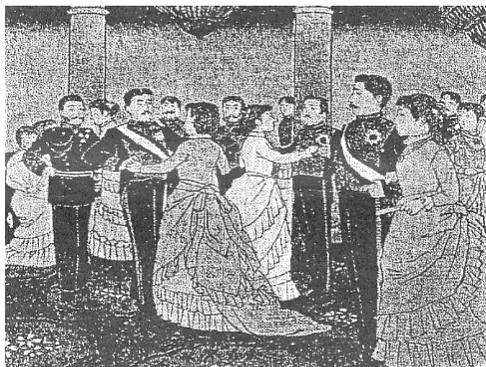


図 A 舞踏会

国当時、すでに輸入されていた。スカートが大きく開かれたもので、フランス人形を想えばよい。その形を保つために内側に針がね様の内当てをする。これがつくれないので着ることができなかった。しかるに鹿鳴館時代になると舞踏会は軽装のパッサルドレスでもよいことになった。スカートの腰の後部を高く持ち上げた形状である。この時代の舞踏会の女装は概ねこれで行われた。(図B)

19年になると宮中の女官たちが洋装化し、20年には洋装奨励の皇后思召が出され、華族女学校での洋服着用が義務付けられるなど、上流階級での洋装が進んだかにみえるが、これは表面上のことで、実はこの時代の女性洋装はそれほど拡まらなかった。図Cを見られたい。この絵は明治17年6月某日に鹿鳴館で行われた上流夫人によるバザーの会である。伊藤博文夫人をはじめ閣僚級の



図 B パッサルドレス

夫人及び令嬢によって行われたものであるが、殆んど和服である。舞踏会ではその性格上、洋装でなければ始まらないが、バザーではその必要がない。着慣れた和服で出席したのであろう。軽装とされたパッサルドレ



図 C 明治 17 年 6 鹿鳴館のバザー。和服が多い。

スでも腰をコルセットで締めなければならないし、履き慣れない靴を履かねばならない。下着や肌着、靴下はどうしたのだろう。すでに洋裁職人が現れて兵隊服を縫い上げたが、女流洋裁師が登場するのは後のことである。輸入品を手に入れたのだろうが高価である。上流階級でなければできないことであった。

鹿鳴館を舞台とする女性の洋装騒ぎは17年、18年、19年頃で、20年になると沈静してきた。新聞も興味本位にこれを書き立てたが、21年頃になるとこれを無視したり、からかうようになった。東京日々新聞は鹿鳴館の女装を支持したが次第にこれを批判するようになった。21年8月23日の記事では女性洋服を最盛期の半分になったとし、腹痛、子宮病、食欲不振はすべてコルセットの圧迫によるという珍説を紹介し、女性服をあて込んでミシンを取り寄せた商人が大損したと報じている。病気にならずとも洋服のままでも和風の疊敷の居間ではくつろげず、家に帰っては和服に着替えたろう。和食を箱膳で食するのにも洋装ではさまにならない。自宅はすべて和室、食事も和食

が日常というこの時代に服装だけが洋服と靴というこの風態は異常である。前に紹介した新しい女性の洋服姿も特殊なものであった。

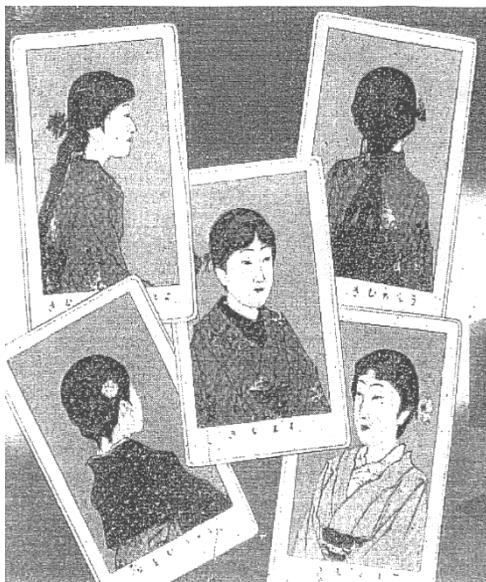
洋装はさて置き、新しい女性の多くが飛びついたのである。洋装で旧来の日本髪では似合わない。あれほど大きな髪を頭に載せては活発に動けない。そもそも女性の大きな髪型は封建時代のものである。レイ王朝時代の王妃達も皇帝の冠^{かんむり}の向うを張って、髪を高く結ばせた。日本とて変らない。武家の妃たちも大名の烏帽子に合わせて高く結う。明治の宮中でも明治15年頃までは同様であった。しかし鹿鳴館で舞踏会



図D 村野徳三郎「洋式婦人束髪法」(明治18年)の一部

が始まると高く結う髪型は邪魔になって西洋人のように髪を短くすることになった。束髪の始まりである。

日本髪の洗髪は大仕事で一年に数回程度しかできない。型をくずさないために箱枕を用い、匂いを消すために香料を用いる。贅沢なわりに不衛生である。よって衛生・経済上から束髪が提唱された。明治18年のことで、東京衛生会、婦人束髪



図E 束髪カルタ

会等が結成された。はじまったばかりの「女学雑誌」も束髪キャンペーンを張っている。こうして新しい女性、社会で活躍する女性は旧来の髪型をやめ、束髪に変っていったのである。束髪は和服にも結構似合った。和服に束髪という姿が明治期の女性の一つの姿となる。とは言え、旧来の日本髪が絶滅したわけではない。古い日本髪のうち、手のかかる大奥宮中の髪型は消え去ったが、既婚者が結った丸髷はそのまま残り粹筋でつくられた高島田は嫁入りの髪型として後世に伝えられた。

なお女性の新しい服装、髪型は女学校から湧き出てくるが、それはその項で述べよう。

参考文献

『目でみる江戸・明治百科 明治暮しの巻』

吉川弘文館『明治時代史大辞典』全4巻

『日本生活史辞典』

山口高等商業学校校長岡本一郎の教育方針について

—鍛錬強調・読書奨励・実業研究の推進—

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

今回は、実業専門学校であった山口高等商業学校の第5代校長(任1932～1945年)を務めた岡本一郎(生1881～没1948年)の教育方針について触れてみたい。岡本一郎は、岩国の出身で山口高等学校、京都帝国大学法科大学(経済学)を卒業してから、第六高等学校講師、水戸商業学校校長、京都帝国大学書記官等を歴任し、欧米諸国の実業教育を視察し、帰国後に和歌山高等商業学校校長となり、さらに山口高等商業学校校長に転任する。

たとえば1938年、欧文社(のちに旺文社)が受験生らに向けて出している『全国上級学校大観』所収の「山口高等商業学校」欄を読んでもと、当時校長を務めた岡本一郎の人となり、教育姿勢が端的に記されている。「校長の岡本一郎先生は熱烈の士である。一寸ムツソリーニに似ていて頭は五分刈で、喫煙排斥論者として知られている。であるから入試に於いても煙草をのむ者は絶対に採らないさうである。煙草をのむ者は心掛けて余程前から、やめて試験に臨まなければ駄目である。此の校長は一ヶ月以内に煙草を口にした者は容易に発見し得ると言ふ」(『同上』253頁)。

岡本校長は、山口高商の新生に向けて、次のように述べている。「学校に来て居りながら書物を読むでなく、修養するでなく、それかと云つて身体の鍛錬をするでもなく、毎日ぶらぶら過すことは仮令積極的には悪い事はしないにせよ私は悪い事と思ふ。即ちそれだけ学生生活を無駄に過している事になる…日々の課業を忠実に研究し立派な体力を養ひさうして日本国民とし

て恥しくない精神力を鍛へて貰ひ度い…諸君は厳格な身体検査により選出されたのであるがまだ顔色の悪いものがチラホラ見受けられる…日本を双肩に担ふて立つ青年が体力の虚弱な、思慮に乏しい、品性学識に劣る青年であればどうなるだらう…最も恥づべきは毎日何等為ることなくぶらぶら遊ぶ事である。本校では全校生徒断髪にしてある。之は剛健の風を養ふ為の一手段である。華美に流れず真に学生らしき生活を為さしめんとする一示唆に過ぎないのである…諸君は大いに体を鍛へねばならぬ。体を鍛錬するには必ずしも運動の選手となる必要はない。上手下手は問題ではない。運動をすれば身体を鍛へると同時に、精神力を養ふことが出来る。本校学友会にはテニス、相撲、柔道、剣道、野球、蹴球其他色々に沢山な部が設けてあるから諸君一人残らず此等の部を利用して運動をやつて貰ひ度い。さうすれば勇猛果敢な精神が養はれ、退嬰的な者は積極的となり陰惨憂鬱な性格は一変して明朗快活となる。諸君の中には引込み思案の人がある。さうした人は胸を張つて目を大きく明けて大跨で堂々と歩いて御覧なさい。私は必ず諸君が積極的となり得る事を保証する」(『山都学苑』第2号、1938年、3～5頁)。実際に、運動施設として、1935年にはプールが新設され、1938年には運動場が新装されて環境面も整備されている。

また岡本校長は、運動を始めとした日々の鍛錬を強調するだけでなく、山口高商の生徒らに対して、読書活動を熱心に奨励している。校長の岡本を始めとした山口高商の教員らが、良書とされる文献を推薦紹介する『読書之栞』を定期的に編集発行するなどして、生徒らによる図書館での図書利用を積極的に促すようにつとめている。たとえば、『読書之栞』第5集(1940年)では、岡本校長自ら生徒らに対して、和辻哲郎『偶像再興』や岡倉天心『茶の本』、ミル『日本人』などを推薦している。

熱血な岡本校長の主導により、山口県下の諸学校も糾合されて、「山口県実業教育協会」が組織される。岡本校長は、県実業教育協会の会長に就任し、協会が刊行する『実業之山口県』創刊号(1936年)の巻頭で、「実業教育の回顧」として次のように述べている。「山口県の産業に何等見るべきものは無いではないか。人に言はすれば『資源が無いから』と言ふかも知れないが、然し先にも述べた様に日本の状態を見ると必すしもさうとは言へまい、山口県の工業は近来著しく発達して来た。即ち上は岩国附近より下は宇部の工業を除いた他の地方の工業は、殆ど山口県ならぬ他府県人の投資経営に基くもので、之は他府県人の工業で真の意味の山口県の工業とは言へまい。換言すれば山口県は恵まれたる其の自然を全部提供して、他府県人の仕事場たらしめて居るのではないか。勿論有るは無きに勝り、之等も迎へて喜ぶべきではあるが、斯る状態で果して維新傑士の気魄を受継ぐものと言はれようか…かくては国力の疲弊を招くのは寧ろ当然である。此の場合『俺等がやつてみせよう』とは思はぬのであるか、尤もそれが直接間接に山口県民の福利増進となるのは言ふまでもない…以上の議論には恐らく誰人も異議は無いだろうと思ふ。そして之が其の地形、原料に恵まれぬためだとは決して言へないことは勿論である。我が防長人士の猛省と発憤を熱望して已まない…尚一層発展していかなければならぬし、又其の余地がまだ十分なのである。之には困難の伴ふことは言ふまでもあるまいが、それに打克たねばならぬ。苦難克服である。研究調査である」(『同上』7～8頁)。山口県下の実業教育の現状に対して、発展や向上を意識した発憤を促す檄といえよう。

明治後期に興った女子の専門学校(7)

文学作品から見る明治女学校

ながもと ゆうこ
長本 裕子(ニューズレター同人)

明治23年に移転した麴町区下六番町時代の明治女学校の様子を、生徒や教員として関わった人物の作品から見てみよう。

日本初の女性ジャーナリストであり、雑誌『婦人之友』を出版し、大正10年に自由学園を創立した羽仁もと子(旧姓松岡)は、25年7月に速記科を卒業し、高等科に編入した。その頃は100人以上が寄宿舎に入っていたという。羽仁の「半生を語る」から概略しよう。



羽仁もと子

「寄宿舎では、間食は一週間に一度、土曜日に三銭分だけだったが、焼き芋、餅菓子、お豆など一度に食べきれないくらいで、この日が楽しみだった。部屋の代表が出る献立会議ではおさつの味噌汁など注文もできた。日々5分と変わらない規則正しい時間に、よく調理された簡素な食物を、適量にきちんとした体裁で摂ることができた。

日曜日には、一番教会(富士見教会の前身)に行った。植村正久先生の説教にひきつけられた。星野天知先生の唐詩選や詩経の講義、鈴木弘恭先生や大和田建樹先生などの枕草子や歌の話は本当に面白いものであった。お昼のあとの巖本校長の講話は多種多様で、その風采その能弁、本当に華麗であった。」

羽仁は高等科2年の夏休みに郷里に帰り、間もなく小学校の教師になり、明治女学校を辞めてしまう。しかし在学中、巖本のお使いで、加藤弘之博士

(帝国大学総長)、女子学院の矢島楯子、跡見女学校の跡見花蹊などいろいろな名士に会ったことが、後のジャーナリスト羽仁を育んだ。経済的に余裕がなかった羽仁は巖本に掛け合い、授業料免除の上に『女学雑誌』の仮名つけの仕事で寄宿料に替えてもらっていた。羽仁にとって巖本は恩人であった。

明治女学校を卒業し、新宿中村屋創業の実業家として、また著述家として活躍した相馬黒光(旧姓星良)は、28年明治女学校に転入した。宮城女学校でストライキ事件に巻き込まれて自主退学し、転校したフェリス英和女学校では宗教上のことで悩んだ。宮城女学校のストライキ事件で退校処分となり、明治女学校に転入した友人小平小雪と一緒に星野天知を訪ねたことがきっかけとなった。『女学雑誌』を通して憧れていた明治女学校は、全盛期には300人くらいいた生徒も、100人くらいに落ち込んでいた。相馬の自伝『黙移』から概略しよう。

「巖本校長は、背が高く、うるおいのある大きな眼、見事なあごひげとほおひげ、やや厚く色あざやかな唇、およそ男性的なあらゆる美を備えた姿であった。フェリスでは何か疑問を抱いても口に出せなかったが、巖本校長の講話は、女義太夫や噺家の名が出るなど、芸術至上の精神から示されるものは自由で、味わい深いものであった。聴いているうちに視野がぐんぐん広がり、向上の精神が示されるようであった。講堂を出てくるときは誰も感激に眼を輝かせ、人生の喜びを深く感じ、敬服した。巖本校長の魅力は大きく、知識と思想をひたすら求めるその頃の若い女性の眼に、神の如く映った。しかしこれが不幸の原因になった。

先生たちは20代の若さで、明治学院出身の島崎藤村先生、戸川秋骨先生などがいて実に礼儀正しかった。明治女学校の学問は豊かな文芸の野に展げていた。」

建物も机や椅子なども設備はガタガタであったが、文学に目覚めていた相馬にはほぼ満足する授業であった。しかし、藤村には失望した。英文学を学んだが、この頃の藤村は生徒たちから「石炭がら」と言われて、講義は少しもおもしろくなかった。25年9月に高等科英文科教師として勤めた頃の藤村は、真面目で清純な情熱が生徒を感激させた。しかし、教え子佐藤輔子(後の北海道大学総長佐藤昌介の妹)に恋をし、むろんプラトニックなものであったが、教師でありながら生徒を愛したことに苦しみ、わずか半年で辞表を出し、キリスト教も棄て、関西へ放浪の旅に出た。相馬が教わったのは、北村透谷自殺後の後任に、家庭の事情からやむなく再び教壇に立った抜け殻の藤村だった。

この前後のことは、後に藤村が小説『春』や『桜の実の熟する時』に書いている。『春』に、勝子(輔子がモデル)は許嫁に岸本(藤村がモデル)への思いを告白し、「しかし、わたしはあなたの言うとおりになります」と言って嫁ぎ、つわりがもとで亡くなったと描かれている。輔子は藤村の写真をハンカチに包んで持っていたという。

相馬が入学した時には、透谷はすでにこの世にいなかったが、『女学雑誌』303号・305号(25年2月6日・2月20日)に掲載の「厭世詩家と女性」に示された恋愛至上主義は、多くの青年男女に影響を与えた。透谷のプラトニッククラブの相手齋藤冬(英語学者齋藤秀三郎の妹)は、宮城女学校の先輩で、ストライキ事件により小平小雪とともに退校処分となり、明治女学校に転入

した。冬は人柄、頭脳ともに優れていた。相馬が冬の姪から聞いた話が『黙移』に挿入されている。概略しよう。

「透谷の時間となると冬は一番に冴えて見え、いつの間にか透谷と冬は一つ机をはさんで向かい合い、まるで一問一答の形で教え、質問し、論ずるといふふうであった。級友たちもその二人の一問一答を聴いて、非常に興味深く勉強した。明治女学校では、そこにいやしい想像をめぐらすものはいなかった。冬の内部に閉じ込められていた文芸的な素質がぐんぐん引き出された。」

冬は透谷に傾倒してしまう。冬は背が高く見事な体格で、頼りになる指導者的存在であったのに、肺病にかかり、やせ衰え、最期を仙台で過ごしたいと、汽車一車両を借り切って帰郷した。透谷が自殺した1ヶ月後に亡くなった。死後体を清める時にふところから透谷が与えた手紙が発見されたという。

相馬は、明治女学校がキリスト教主義により、厳粛なうちに思い切った自由があり、芸術至上の精神を実生活に織り込んで、巖本の、女性を向上させる素晴らしい思想が実現されている学校であったが、輔子や冬のような先生を崇拜するあまり、痛ましい恋の犠牲者が出たことに無念をにじませている。



女学生の相馬黒光

参考文献

青山なを著『明治女学校の研究』

島崎藤村著『春』『桜の実の熟する時』

相馬黒光著『黙移』

羽仁もと子著「半生を語る」(『羽仁もと子著作集』第14巻)

藤田美実著『明治女学校の世界』

星野天知著『黙歩七十年』

教育史研究の周辺①

学校を經由した社会移動研究(再生産戦略編③)

かとう よしこ
加藤 善子(信州大学)

日本で「中流階級」が育たなかった訳

園田(1999)は、「上流階級が存在しない所では、『中流』階級の議論も成立しない」という。とりわけ、「『上層』の中流階級の成立は、有力な上流階級の存在が前提になっていた」¹。日本において「中流階級」(あるいは、「ミドル・クラス」もしくは「中産階級」)が育たなかったのは、上流階級としての華族の脆弱性であった。

華族は、確実な財産を裏打ちとした有閑階級ではなかった。昭和11(1936)年12月に調査された『華族家庭録』を分析した園田によると、実際に「働く」華族が数多くみられ、「華族のかかなりの部分が、事実上の中流階級であった」という。「公家と大名の文化的融合」は容易には埋まらず、上流階級が安定して成り立つための「共通の社会経済的土台」と、「共通の生活様式(つまり文化)」が、どちらも欠如していた。上流階級が形成できなかつたために、結果として「上層」中流階級の輪郭も明確にならず、「中流階級全般の階層的明確性」を確立することができなかつた²。

「上層」中流階級と「エリート」

共通の文化や生活様式を持つことができないと階級は成立しない。近代日本では、「上層」中流階級に代わって「エリート」が生まれた。「エリートとは、社会階級というよりは、組織上の希少な地位を占める存在のことである」。エリートとしての文化はあるはずだが、それはエリートの「地位」に付随するもの

であって、「その逆ではない」。エリートを支えるのは組織上の地位だけしかなく、それはヨーロッパの「上層」中流階級が収入・財産・生活様式の複合体に支えられているのと対照的である³。しかし、日本の上流階級として期待された華族は、宮中席次において官僚層よりも低い席次であって、「官僚制的序列の補完物としての地位しか与えられていなかった」⁴。

「エリート」層は文化を共有するに至ったか

明治後期になって全国に中学校が整備され、小規模地方都市から中央への上昇移動ルートが確立されると、「出郷」して「立身出世」を遂げる「流動エリート」が輩出されるようになる。これまでの地理移動研究が示す通り、いったん「出郷」した高学歴者は、地元に戻ってくることはほとんどない。そのような「流動エリート」が、業種や世代を超えるどのようなネットワークを持っており、どのような文化を共有していたかを探ろうとしたのが井上(2006)である⁵。加越能地域を「出郷」した流動エリートの誰が、「郷友会」(いわゆる「県人会」や「同郷会」)に加入してどのような交わりを求めていたのかを分析したものの、郷友会は、欧米のクラブやサロンのような機能を持つことはなかった。一部の職種(高学歴層・高級官僚・軍人)にのみ開かれたもので、若い世代にとってコネクションを得たり深い人間関係を結んだりすることは期待できなかった。この分析により、「近代セクターへ進出した流動エリートの孤独な側面が改めて浮き彫りになった」と井上は書いている⁶。

「学歴エリートとは、不安定な存在である。その地位は、世代を超えて継承される保証はない」⁷。そして、親密に人間関係が取り結ばれたのは、「各人の所属するそれぞれの身近な学閥や同窓集団、職業集団の中で」のみであったと考えられ⁸、再生産戦略といった場合、それはおそらく「階級全体としての

文化的・生活様式の再生産」ではなく、非常に狭い職業集団のなかで、限定的に意識されたのではないかと推察される。

注

- 1 園田英弘(1999)「近代日本の文化と中流階級」『近代日本文化論5 都市文化』, p.109.
- 2 前掲書, pp.110-111.
- 3 前掲書, pp.113-114.
- 4 前掲書, p.110.
- 5 井上好人(2006)「近代日本の『流動エリート』と郷友会ネットワークー加越能郷友会の事例一」『教育社会学研究』第78集, pp.191-211.
- 6 前掲論文, pp.207-208.
- 7 園田英弘(1999)「近代日本の文化と中流階級」『近代日本文化論5 都市文化』, p.115.
- 8 井上好人(2006)「近代日本の『流動エリート』と郷友会ネットワークー加越能郷友会の事例一」『教育社会学研究』第78集, pp.208.

カレッジノベルの研究への道(4)

:アメリカの研究に見るカレッジノベル(3)

よしの たけひろ
吉野 剛弘(埼玉学園大学)

前号ではアメリカにおけるカレッジノベルに関する学術論文や著書を列挙したが、今号ではその内容について見ていくことにする。

本号では、高等教育研究のアンソロジーである *Higher Education: Handbook of Theory and Research* の第4巻に収録されている John R. Thelin, Barbara K. Townsend による 'Fiction to Fact: Novels and the Study of Higher Education' について検討していくことにする。同論文は、1987年の2月にサンディエゴで開催された Annual Meeting of the Association for the Study of Higher Education での発表をもとに執筆されたものである。

この論文では、カレッジノベルを主題とした研究の可能性が検討されている。筆者らは80のカレッジノベルを精査した上で、いくつかのカレッジノベルを文学研究の手法を用いて、正規のカリキュラムより課外活動に重きが置かれる傾向があることを明らかにしている。さらには、読者の一部に含まれることになる未来の学生たちにとって、小説の登場人物がロールモデルとして影響を与えるのではないかと述べている。

カレッジノベルは史料的な問題をはらみつつも、それを逆手に研究は可能であるというのが論文全体を貫く趣旨なのだが、論文ではカレッジノベルを扱うことの是非について、想定される疑義に反論する形で議論が展開されている。3つの疑義が呈されているが、以下にその詳細を示す。

第一に、カレッジノベルというのはジャンルとして確立しておらず、系統的

な分析には不適切な素材であるという疑義である。これに対しては、本ニューズレター第 50 号で取り上げた Kramer のアンソロロジーなどに依拠しつつ、425 のアメリカのカレッジノベルは以下のような分類が可能であると反論する。

Faculty-staff versus student-centered plots

Private versus public institutions as settings

Decade-by-decade chronology

Land-grant college novels

Novels about women's college

Novels by authors who actually attended the depicted college

以下に試訳を示す。

教員対学生の構図のもの

舞台設定が私立対公立のもの

時系列に進む話

ランドグラントカレッジに関するもの

女性大学に関するもの

実際に通った人によるもの

具体例が示されているわけではないので、どのようなものが想定されているのかが分かりづらいものもある。また、分類には付き物だが、複数のものに該当する場合もあるかもしれない。そのような問題はあるものの、アメリカではこのような分類は可能なほどにカレッジノベルが存在しているということだけは確かである。

第二に、カレッジノベルで取り上げられる大学は一部のものに限られており、その分析結果はゆがめられたものになってしまうという疑義である。筆者らは精査した 80 のカレッジノベルのほとんどがいわゆる世界的にも有名な大学を舞台にしている事実をもとにその指摘を認めた上で、そのような事実をふまえて使用すればよいと反論する。

第三に、客観的な事実を描写することを目的としていない以上、怪しげな典拠をもとに書くこともありえるのであって、史料としては問題をはらんでいるという疑義である。これに対しては、そのような事実にこそ意味があると反論する。たとえば、卒業生などが描く世界はその人の目線で書かれていることに意味があり、それゆえに新たな大学像(より忠実に原文の言い方に従えば、「エッジの利いた」大学像)を見て取ることができるということである。

この論文では、カレッジノベルが大学を知る上で重要な役割を持つケースについても触れられている。George Waller の *Not to Eat, Not for Love* は、世界的な大学に成長しようとしていた 1920 年代後半のハーヴァード大学の変化の複雑さをよく描写しているといわれる。また、イエール大学の Department of Political Science (総合学術大学院の政治科学部門)を知りたいければ、Helen Hudson の *Tell the Time to None* を読むべきだともいわれる。もっとも、後者に関しては、作者本人の言なので割り引いて理解した方がよいと思われる。

これまで 3 回にわたって、アメリカのカレッジノベルについて取り上げてきた。研究の全てをカバーしているわけでもなく、その検討は今後の課題でもある。前号ではいくつかの研究論文を検討すると述べたが、この連載ではカレッジノベルの研究の状況を概観することを目的としたいので、ひとまずこれまで見てきたものをふまえて、日本の状況と比較しておきたい。

Thelin と Townsend の主張は、おおむね日本の場合にも当てはまるように思う。以下、先述した疑義を日本の場合で考えてみたい。

第一の疑義については、そもそも日本にカレッジノベルと分類されるものがあるのかという問題がある。アメリカには少なくとも 425 のカレッジノベルがあるということは可能だが、日本にいくつあるかは不明である。

日本におけるカレッジノベルがいくつあるのかという問題は、第二の疑義とも関連する。そもそも日本の方が大学数は少ないし、戦前はさらに少ない。おのずと舞台となるのは有名大学になってしまいそうである(アメリカの大学でも同じ問題があるようにも思う)。また、第 50 号で述べた Kramer らのアンソロジーの収録基準にある医学校や軍学校に関するものを除くという考え方を日本に直接当てはめれば、対象はさらに減少するだろう。この基準を厳格に適用したら、明治期のカレッジノベルには帝国大学(明治 10~19 年までの東京大学を含む)とそこに在籍する人々しか登場しないことになる。

先述の Thelin と Townsend による分類ではランドグラントカレッジに関するものというのがあるが、日本に直接適用することは不可能である。おそらくはアメリカの分類とは異なるものが必要になるものと思われるが、それも一定の蓄積がなければ分類のしようがない。

第三の疑義に関しては、本ニューズレター第 49 号で触れた通りである。ここでは『白い巨塔』を例に出したが、まさに同じことが論じられているといつてよい。そのような点を考えても、日本におけるカレッジノベルは、検討の価値があるものと考えられるのである。

では、日本のカレッジノベルについては、どのように考えていけばよいだろうか。次号では、日本の状況について見ていくことにする。

「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で 「カリキュラム・マネジメント」を教える試み(5)

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

これまで標記の試みについて、4回にわたって書いてきた。すなわち、第47号では、文部科学省の「教職課程コアカリキュラム」についての考察、第49号では「カリキュラム・マネジメント」概念の紹介、第50号では学生に検討してもらったデータ(筆者の前年度担当の授業評価アンケート結果データ)の紹介、第51号では学生が前年度カリキュラムを評価してまとめた意見の紹介をおこなってきた。本号では、こうした取り組みの成果や課題について考察していく。

そもそも、「教職課程コアカリキュラム」において求められていたのは、学生が「カリキュラム・マネジメント」の意義・重要性・基礎的考え方について学ぶことであった。どうせやるのなら、各教科の指導法について本格的に学ぶ前の学生であっても実感をもってこのテーマについて考えてもらいたいと思った。そこで、筆者の担当科目の授業評価アンケートの結果を素材に学生にカリキュラム評価をおこなってもらい、忌憚のない意見を出してもらおうという方法をとった。

誰も、「自分の授業を批判されたくない」という気持ちがあるのではないかと思う。授業実践の経験のない学生は、将来教員になったとき「カリキュラム・マネジメント」において自分が批判されるのは気が進まないのではないかと思われる。そうであるからこそ、筆者自身が批判の対象となる様子を見せておくことも役立つのではないかと考えたのである。

では、学生たちは「カリキュラム・マネジメント」の意義などについて、どのように考えを深めたのだろうか。授業中に提出してもらったミニツツペーパーのなかで、「カリキュラム・マネジメントの意義と在り方について改めて考えたこと」について学生たちにまとめてもらったので、以下、学生たちが書いた内容の一部を紹介しながら考えてみたい。

カリキュラム・マネジメントの意義についての意見

「カリキュラム・マネジメントの意義と在り方について改めて考えたこと」の前半部分である意義について学生たちがまとめた意見の一部を紹介する。

授業を円滑に進め、生徒にわかりやすく確実に知識をつけさせるために必要なものであると思う。(意見A)

教師や学生共に、自身のふりかえりとなり、より良い授業を作ることができる。(意見B)

生徒の意見や実態を踏まえることで、よりよい授業作り、学校作りを行う。(意見C)

目標や目的を明確にしながら振り返ることで、改善点も目標に沿って考えられる。(意見D)

教科横断的な視点で授業を組み立てやすくなり、応用力を伸ばすことができる。例えば、農家でビニールハウスを作りたいとしても、数学や技術の知識などが必要となるなど、実生活で使える学問として教員も生徒に教えることができる。(意見E)

上記の「意義」についての意見(A～E)から、カリキュラム・マネジメントやカリキュラム評価の意義について、自分の言葉で考えようとしていた受講生がいたことがわかる。自分の言葉でカリキュラム・マネジメントについて考察しようという傾向は、以下の「在り方」についての意見にさらによく表れている。

カリキュラム・マネジメントの在り方についての意見

「在り方」についての学生からの意見としては、例えば以下のようなものがあった。

カリキュラム・マネジメントには、生徒からの率直な意見が必要不可欠であり、良い点よりも悪い点を聞き、教員が連携して意見し、問題解決につとめ、よりよい授業づくり、学校づくりをすることが、カリキュラム・マネジメントの在り方であると思う(意見F)

教師間の優劣をつけるのではなく、あくまで教育活動の質の向上のために行う。人柄や経歴などに関係なく客観的に改善点や良い点を伝えあうようにする(意見G)

授業評価アンケートで教員の評価の数値上の差を明らかにすることが目的ではないので、アンケートからデータ化された意見の評価を、以降の授業づくりに役立たせるようにしていくべき(意見H)

学生は教員にいい顔をしたり見栄をはったりせず、率直な感想を伝えるべき(意見I)

授業に肯定的な意見だけでなく、否定的な意見であっても、本人を向上させる建設的な意見として受け止められるようにする(意見J)

今日の授業のように、時間をかけて授業の分析を行った後にアンケートを実施すべき(意見K)

アンケートでは雑な意見も同時にあつたりするので、慎重に考えていく必要がある(意見L)

せっかくアンケートをとったとしても、そこから得られる改善点を授業に活かさなければ意味がないので、きちんと改善されているか知識のある人がチェックする仕組みが必要だと思う(意見M)

今後、広くカリキュラム・マネジメントが適用されると一步先の授業が実施できる。しかし、地域との連携などは、事前準備に十分な時間と手間が必要となる(意見N)

生徒の率直な意見(批判的な意見も含まれると思われる)を受け止めて授業改善に役立てていくことの重要性を自分なりに実感した意見(F、I、J)や、カリキュラム・マネジメントが教員の能力の優劣をつけることが目的ではないととらえた意見(G、H)、実施したときの課題について具体的に想像して考察した意見(K、L、M)などがあり、カリキュラム・マネジメントを自らに関わりのあることとして、自分の言葉で表現しようとする受講生がいたことがわかる。このことは、今回の実践のささやかな成果かもしれないと考えている。

もちろん受講生の意見のすべてを紹介したり、グループ分けして統計処理を施したわけではないので、今回紹介した実践の成否を客観的に判断することは難しい。このことは、時間を費やしてこの実践を続けていく上での課題となるだろう。

この課題への取り組みとして来年度の授業においては、例えば、カリキュラム・マネジメントについて体験的に学ぶ回の前と後での意識の違いを知るための手段を講じていきたい。

なお参考資料として、2018年度「教育課程・方法論A」(富岡担当)のシラバスを以下、添付しておきたい。本稿ではこのなかの第14回授業について詳述した。

科目名：	教育課程・方法論A				
英文名：	Curriculum and Instruction A				
担当者：	富岡 勝				
開講学科：	教職課程（本学）				
単 位：	2単位	開講年次：	1年次	開講期：	前期，後期
科目区分：	専門科目				
備 考：	必修選択の別：選択必修科目				

■授業概要・方法等

本科目は、「教育課程の意義および編成の方法」と「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）」とについて学ぶことを趣旨とするものであるが、Aにおいては特に教育課程の意義および編成の方法について主眼をおき、あわせて教育の方法や技術についても扱っていきます。この科目の修得は、近畿大学における教員養成の理念と目的の主として「2. 教員に求められる専門性、実践的指導力の養成」の達成に関与しています。

この授業では、五つのテーマの授業計画づくりに関するグループ発表も実施していくなかで、教育課程に関して体験的に学習していきます。教育方法の主要事項、教材の活用方法、情報機器の効果的利用方法についても紹介しますので、発表での工夫にも活かして下さい。グループでの授業計画作成は個人作業よりも困難な面もありますが、そうした経験は、学校の中でチームワークを活かした授業づくりに必ず役立つだろうと考えていますので、受講生諸君の積極的な参加を望みます。（ほぼ毎回、授業内容に関連した小レポート（ミニツツペーパー）をその場で書いてもらいます。

授業への出席を前提とした上で、「定期試験に代わるレポート」、宿題レポート、その他の小レポート・発表状況等を考慮し、総合的に評価します。

■アクティブ・ラーニングの形態

■ICTを活用したアクティブ・ラーニング

■使用言語

■学習・教育目標及び到達目標

この授業の教育目標を以下の通りとします。

1)教育課程編成の方法と教育方法の工夫に関する基礎的事項について、受講生が多様な視点から理解していくこと。 2)五つのテーマで授業計画づくりに関するグループ発表と最終レポート作成を行うことにより、受講生が教育課程編成に関して体験的に学習すること。 3)受講生がグループ内で他者ときちんと意見交換して協力する力を伸ばすこと。 4)話し合いやグループ発表を通して、受講生がわかりやすく発表する力を伸ばすこと。

■成績評価方法および基準

定期試験に代わるレポート 45%

宿題レポート 20%

その他の小課題等への対応・発表状況等 35%

■試験・課題に対するフィードバック方法

宿題レポートおよびミニツツペーパーは、第15回までの授業において返却・講評します。試験に代わるレポートについては、全体講評を掲示またはU N I P Aを通して公表します。試験に代わるレポート返却については、返却希望の連絡をした受講生に対して、研究室において対応します。

■教科書

授業はすべてプリントに基づいて行います。プリントは授業中に配布します。

■参考文献

[ISBN]9784827815405 『中学校学習指導要領 平成20年3月告示』（文部科学省，東山書房：2008）

[ISBN]9784827815412 『高等学校学習指導要領』（文部科学省，東山書房：2015）

[ISBN]9784316300818 『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 高等学校編』（文部科学省，教育出版：2013）

[ISBN]4589034980 『シティズンシップ教育のすすめ—市民を育てる社会科・公民科授業論』（杉浦 真理，法律文化社：2013）

[ISBN]9784180638239 『授業と学びの大改革「学びの共同体」で変わる！高校の授業』（佐藤 学，明治図書出版：2013）

[ISBN]不明 雑誌『のら』農山漁村文化協会（図書館の雑誌コーナーにあり）

[ISBN]4761920890 『授業づくりエンタテインメント！—メディアの手法を活かした15の冒険』（藤川 大祐，学事出版：2014）

[ISBN]4480059997 『教えることの復権（ちくま新書）』（大村 はま，筑摩書房：2003）

[ISBN]4820802569 『時代を拓いた教師たち—戦後教育実践からのメッセージ』（田中 耕治，日本標準：2005）

■関連科目

他の「教職に関する科目」および「教科又は教職に関する科目」のすべて

■授業評価アンケート実施方法

本学の規定に準拠して実施します。

■研究室・メールアドレス

研究室：旧本館6階622（ポストは旧本館6階エレベータ前集合ポスト「富岡」）

メールアドレス： tomiokamasama@kindai.ac.jp

研究室を訪問する際、オフィスアワー以外の曜日・時間帯についても電子メールで相談することができます。メールでの問い合わせには、原則として24時間以内に簡単な返信を行います。

■オフィスアワー

月曜日12時30分～14時40分

■授業計画の内容及び時間外学修の内容・時間

第1回 これまで受けてきた授業を振り返り、教育課程の目的と社会的意義を考える。

予習内容：これまでの学校生活で受けてきた授業について思い出しておいてください。

予習時間：30分

第2回 学習指導要領とは何か（改訂の変遷や社会的背景、社会に果たす役割への考察を含む）

予習内容：教育課程編成の改訂の変遷について下調べしておいてください。

予習時間：30分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

復習時間：15分

第3回 学習指導要領をもとに教育課程編成の目的と方法の基本を学ぶ

予習内容：中学校学習指導要領の総則について下調べしておいてください。

予習時間：30分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

復習時間：15分

第4回 キーワードをもとに教育課程編成について学ぶ（1）経験主義と系統主義

予習内容：戦後直後の経験主義教育の概略について下調べしておいてください。

予習時間：30分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

第5回 キーワードをもとに教育課程編成について学ぶ（2）基礎的基本的な知識・技能

予習内容：1950年代からの系統主義教育の概略について下調べしておいてください。

予習時間：30分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

第6回 第6回 キーワードをもとに教育課程編成について学ぶ（3）「教科領域横断的教育・総合的な学習」と「主体的・対話的で深い学び」

予習内容：総合的な学習の時間と主体的・対話的で深い学びについて下調べしておいてください。

予習時間：45分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

復習時間：15分

第7回 授業の構成要素と学習評価への理解に基づき学習指導案を工夫する

予習内容：授業の構成要素について下調べしておいてください。

予習時間：30分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

復習時間：15分

第8回 教育方法の基礎的理論を理解し、情報機器を活用した教材の効果的な活用と子供たちの情報活用能力育成について考える。」【宿題レポート】五つのテーマから一つを選択し、①そのテーマに関するヒントを提供していると思われる授業実践例（授業実践報告の図書や雑誌論文、授業の紹介記事など）を調べて紹介し、②その授業がどのようなヒントを提供しているか、③そのヒントをもとに、どのような授業計画を作っていきたいかについて具体的に述べること。第9回で提出。（詳細は授業中に説明）

予習内容：情報機器を活用した教材の効果的な活用について下調べしておいてください。

予習時間：30分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

復習時間：15分

第9回 授業実践例から教育課程編成と教育方法・技術を学ぶ（1）各自で調べた内容を宿題レポートにまとめて共有する

予習内容：選択したテーマに関する宿題レポートを完成させてください。

予習時間：180分

復習内容：授業中話し合った内容を踏まえ、発表準備を分担して進めてください。

復習時間：120分

第10回 授業実践例から教育課程編成と教育方法・技術を学ぶ（2）テーマごとのグループで発表準備を行う

復習内容：授業中話し合った内容を踏まえ、発表準備を分担して進めてください。

復習時間：120分

第11回 授業実践例から教育課程編成と教育方法・技術を学ぶ（3）おもに経験・体験に関するグループ発表と検討

予習内容：発表班の受講者は分担して発表準備を完成させてください。

予習時間：120分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

復習時間：15分

第12回 授業実践例から教育課程編成と教育方法・技術を学ぶ（4）おもに基礎的基本的な知識・技能に関するグループ発表と検討

予習内容：発表班の受講者は分担して発表準備を完成させてください。

予習時間：120分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

復習時間：15分

第13回 授業実践例から教育課程編成と教育方法・技術を学ぶ（5）おもに知識・技能の活用とアクティブラーニングに関するグループ発表と検討

予習内容：発表班の受講者は分担して発表準備を完成させてください。

予習時間：120分

復習内容：プリントを読み直しておいてください。

復習時間：15分

第14回 カリキュラム・マネジメントの意義を理解し、生徒・学校・地域の実態を踏まえた長期的視野からカリキュラム・マネジメントの在り方（カリキュラム評価の在り方を含む）を考える

予習内容：カリキュラム・マネジメントについて下調べしておいてください。

予習時間：30分

復習内容：「生きる力」について再考したことを、「定期試験に代わるレポートにどのように活かせるか考えておいてください。

復習時間：15分

第15回 まとめ（これからの教育課程編成を展望する）と「試験に代わるレポート」提出

予習内容：これまで学んだことを活かしながら「定期試験に代わるレポート」を完成させてください。

予習時間：240分

【定期試験に代わるレポート】「①自班で発表したテーマに関連した内容で、10時間から35時間の単元の学習指導計画を書くとともに、②他の班の発表からわかったこと考えたことについて具体的に述べること」（詳細な注意事項は授業中に伝えます）。第15回授業で提出。

■ ホームページ

■ 実践的な教育内容

我流・文献紹介(13)

—高等学校新学習指導要領をもたらしたもの—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

1970年11月6日、文部省は「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定および高等学校学習指導要領の全部を改正する告示の公示について」という通達を出した。1960年版高等学校学習指導要領が文部大臣告示として、法的拘束力を強めて以来、その一部を改正して必修科目を拡大し、コース制を強めてきたが、ここに於てコース制を取り払い、各学校が自主的につくれる教育課程の枠を上げたのである。この文部省通達の第3項には「…生徒の教育上適切な配慮がなされていると認められる場合においては文部大臣が別に定めるところにより高等学校学習指導要領によらないことができる」とある。前に述べた必修教科科目及びその単位数の削減、教科外活動、特にクラブ活動の必修化と合わせて学習指導要領によらない各学校の自主的教育ができるように文部省が認めたのは画期的なことである。このような画期をもたらした諸因をふり返ってみよう。

私学中高連の要望書がほぼ全面的に認められたのだから、前後4回、私学中高連の研究集会を開き、私学の要望書をまとめた中島保俊委員長をはじめとする委員達の精励努力は功績の一つとしてあげられるであろう。しかしすでに触れたように再三にわたって提出した要望案は集会に参集した私学人に即時認められたものではなかった。反対というよりは教育課程の自主編成という私学人であれば当然の意義を理解できない人々が多かったのである。

1967年、集中的に開いた4回の研究集会もその出席は必ずしも良好ではなかった。全国で約1,200校弱ある私立高校の研究集会出席者は多い時

でも二百数十名、少ないときは九十名に満たなかった。出席は原則一校一人、校長若くはそれに代り得る教員である。前に述べた有力大学附属またはその傘下の高校からの出席は殆どなく、キリスト教系高校の出席者も極めて少なかった。また進学校として名を馳せた開成、麻布、灘の高校なども姿を見せなかった。中高連の教育課程研究は大学進学一辺倒の生徒だけを抱える高校以外の、多くは女子高校によってなされたのである。「要望」の第2回修正案を全国私立高校に送った時の回答率は30%、決して良好とは言えない。

研究集会の提案も討議も熱のこもったものであった。しかし私学の教育課程の自主編成という原則論では多くの賛成を得ても、そのための必修教科科目単位の縮少の段になるととんに保守的になり、現行のままでよいとの声が高くなる。自校の教育レベルをおとしたくない、或は自校の教育レベルが低いとみられたくないという教員心理が働くのであろうが、学習指導要領の必修教科科目単位の縮少と自校の教育課程の低下とは関係ないのである。指導要領を低く押さえて各校の自由裁量の分を大きくすればよいのである。その関係がわからずに、いたずらに現状を保守したがる出席者が多いのには落胆した。アンケート調査も同様で、私学の自主編成という原則論で賛成を得ても、具体論になると現状維持になった。

こうした雰囲気の中で研究委員の十数名と賛同する十数名の参会者の熱弁で要望書の賛成者をふやしていったのである。

研究集会で異彩を放ったのは昭和女子大学附属高校の人見楠郎校長と桐朋女子高校の生江義男校長である。二人ともすでに独自の教育課程を実践していたから発言に迫力があつた。桐朋女子高校は普通科の中に男女共学の音楽課程をつくっていた。ここから音楽の偉材を輩出するのだが、別に音楽のクラブ活動を奨励したら普通科の生徒も一緒になって楽しくやっている旨の報告があつた。会場でこれを聞いた私はすかさず立って、これに卒業単位をやったらどうかと述べた。会場は爆笑の渦となったが生江校長はまん

ざらでもなさそうな笑顔でこれに^{こた}へた。私学の研究集会には毎回、文部省の初等中等教育局の然るべき人を招いて講演や助言を求めた。この場にも文部省の役人が来ていたが、この風景をどう読んだだろう。結果からみると、これは好意的に受けとめられたのである。

私学中高連が高等学校教育課程の改革を発起した1967年から高等学校新学習指導要領が告示された70年まではどのような時代であったか。まず高校生が500万人台を数えるまでに増大したことである。中学から高校への進学率が高まったことにもよるが、これは戦後の第一次ベビーブームが、この時期の好況の波に乗って高校に押し寄せたのである。その生徒の約30%強は私立高校生であった。学校数で約25%の私立高校が30%強の生徒を引き受けたのだから、各学校は大入満員で受験生を選別することができたのである。時の大学進学熱上昇に乗って私学の中にも進学を看板にする高校が目につくようになった。

東京オリンピックも成功裏に終り、それに向けた東海道新幹線も完成して高度経済成長のさらなる成長を目指した佐藤内閣の1968年、東京大学、日本大学で起った紛争が飛火して全国的な大学紛争が巻き起った。69年1月、警視庁は紛争大学67校、うちバリケード封鎖21校と発表、同年5月、文部省は授業放棄、封鎖中の大学45と発表した。そもそも発端は東京大学医学部の登録医制度の反対と日本大学の使途不明金追及であったが、次第に大学の運営そのものへの反対にエスカレートし、他大学からの応援部隊も加わって本郷お茶の水駅周辺数キロにわたって学生が占領する事態になった。そして69年1月末の東京大学安田講堂の占拠、日本大学での学生と警視庁機動隊との戦い、京都大学での反代々木派学生と教職員学生との衝突になる。この全国的な大学紛争の理由は今もよく分からない。一校一校の反対理由は違うようでもあり、大学の現体制に反対することに共通しているようでもある。同時に進行していた米国のベトナム戦争に反対するベ平連の集会に

も大学生が参会している。これらについて総合的な論評はできていない。教育史研究者の一つの課題である。

文部省及び学校関係者を驚ろかしたのは、大学紛争に連動して高等学校でも紛争が起ったことである。その発端は69年3月1日、広島県立皆実高校の卒業式で卒業生総代が卒業証書を破り捨てた事件である。同日、東京の私立麻布高校、大阪の東淀川高校をはじめ多くの高校生徒が反抗的行為を行って卒業式が混乱した。13日、荒木国家公安委員長は高校卒業式の混乱は21都道府県56校で発生したと閣議で報告した。9月になると前期試験をボイコットする風潮が起り、東京都立大学附属高校、都立青山高校等で試験ボイコットが起り教員室が封鎖された。10月22日には都立日比谷高校、都立竹早高校で教室封鎖、無期限ストライキを決議した。朝日新聞は紛争高校、全国で49校と報じた。高校紛争は11月以降の都道府県教育委員会の無期停学を含む大量処分によって終息した(以上『新日本教育年記第5巻』による)

なに故に高校生はこの時期、高等学校に反抗したのであろうか。都立日比谷、都立竹早、私立麻布高校のような、いわゆる“進学校”、成績上位の生徒ばかりを集めて大学受験教育に邁進する高校に限って、こうした反抗が起ったことに気づく。60年代の普通科コース制の選別強化により大学受験高校とそうでない高校の格差は拡がった。同じ高校でも“進学校”は特別な目で見られ、進学校はその地位を守らねばならず、猛烈な受験勉強を強いる。正しい教育のあり方を論じるジャーナリズムも4月ともなれば有名大学合格の高校順位を一せいに載せる。教師も生徒もプレッシャーを受けるのである。これより少し前、東京オリンピック前後に東北の農村地帯から“金の卵”と言われて同年齢の少年達が上京し、見ず知らずの職場で働かされていることも、定時制高校で同年齢の若者が必死に勉強していることも彼らは知っている。豊かな家庭が、そして親が自分を後押ししてしてくれることも知っている。教

師が自校の名誉にかけて教えてくれていることも知っている。“だから嫌^{いや}なのだ”。そのように仕組まれた学校で自分が優秀な生徒として卒業していくのが嫌なのだ。思春期の純情な心を忖度すればこのような気分ではなかっただろうか。1968年から起った大学紛争、高校紛争の時期と70年高校新学習指導要領作成の時期は重なる。大学紛争・高校紛争が新学習指導要領に影響を与えたことは間違いない。

高校問題を含めて戦後後半期の昭和^{昭和}教育史はまだできていない。教育史研究者はこれらの教育史資料を吟味し、その収集に務めるべきではないだろうか。

「ニューズレター・コロキウム」打ち合わせ(2019年3月17日)

の記録概要

かとう ゆうだい
加藤 雄大(日本大学大学院)

2019年3月17日、神辺靖光先生の私邸にて、ニューズレター会員による新しい研究会を開始することについて協議が行われた。打ち合わせ参加者は、神辺靖光先生、谷本宗生先生、富岡勝先生、加藤(記録)の4名である。以下に、当日の話し合いの概要を記す。

今回の打ち合わせを通じて、本研究企画の正式名称を「ニューズレター・コロキウム」とすることが決まった。このコロキウムの目的は、ニューズレター執筆者や読者が個人で手がけている研究を題材として取り上げ、その研究の意義や課題、あるいはその研究の広がりなどについて、参加者が自由な形式で議論することである。

話し合いの過程で、次のような点が確認された。すなわち、

- (1)コロキウムへは執筆者や読者を問わず誰でも自由に参加できるものとし、できるだけ開放的な雰囲気になるように工夫すること
- (2)コロキウムの内容を記録し、ニューズレターで議論の概要を公開することで、メンバー間で活発に意見を交換することができるようにすること
- (3)コロキウムの定期的な開催(1年に数回程度)を通じて、ニューズレター会員の研究を相互に応援するための会となるようにすること
- (4)発表希望者が多い場合は、1回のコロキウムで複数人の研究を取り上げ議論するなど、その都度状況に応じて柔軟に運営していくことなどである。

なお、次回のコロキウムを開催概要は次のとおりである。

ニューズレター・コロキウム(1)

——旧制中学校の生徒「自治」研究をめぐって——

日 時 : 2019年6月2日(日)13時30分

話題提供者: 富岡勝(近畿大学)

指定討論者: 神辺靖光(ニューズレター同人)

谷本宗生(大東文化大学)

会 場 : 神辺靖光先生私邸(高円寺駅下車徒歩約15分)

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

- 1.(目的)広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
- 2.(記事のテーマ)記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
- 3.(刊行頻度・期間)研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
- 4.(編集委員会・編集世話人)発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
- 5.(執筆者)執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
- 6.(記事の責任)記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
- 7.(記事の種類・分量)記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
- 8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
- 9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
- 10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
- 11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

2015年に創基200周年を迎えた山口大学は、山口大学の軌跡を『山口大学の来た道』全5巻(2010～2014年)に纏め、もっかネット上で公開しています。このなかでも、私がとくに興味深い!と感じたのが、大正期の山口高等商業学校が大正期の「大学令」に呼応するかたちで、官立の「商科大学に昇格し、法学部を併置して総合大学とする」(同3巻12頁)という「防長大学」の設立を悲願としたという点です。山口高商の教員にとどまらず、山口高商の生徒や同窓らも熱心に昇格に向け動きかけて、地元の住民や行政を巻き込んでいったといえます。たとえば、1920年11月には400名以上の生徒らが地元の亀山公園に結集し、「昇格か廃校か」の幟をたて地元町内を練り歩くなどして、地元で協力要請を行っています。その間の数日は、なんと山口高商の授業も休講とされたそうです。結局、昭和期に入って同じ官立の実業専門学校であった神戸高等商業学校は大学昇格を果たしますが、戦前期を通じて山口高商の「防長大学」構想は残念ながら実現されず幻となります。しかしながら、昇格の機運を背景として、山口高商では生徒らが自主的に「山口高等商業学校商学研究会」を結成し、研究雑誌も公刊します。また学校側でも、「将来的に大学に昇格するため」(同頁)の研究所機能を果たす「調査部」(調査課)を組織します。調査部(調査課)では、商業・経済関係の資料収集や整理にとどまらず、成果物として「調査課時報」や「生徒生計調査書」などを刊行します。それが1933年には、組織が拡充されて山口高商の「東亜経済研究所」となり、敗戦後の進駐軍による資料接収にともなう研究所の閉鎖まで、東亜(東アジア)経済に関する文献資料センターの役割を果たしていきます。今回は、官立の山口高等商業学校の学校史を少し取り上げてみましたが、その他の学校史・大学史なども読んでみると、きっと興味深い点が幾つも潜んでありそうです。(谷本)

<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/200th/history/historyOfYU.html>

わたしも参加している「学校資料研究会」(学芸員・大学教員・大学院生など)
<<https://gakkoshiryu.jimdofree.com/>>で、『みんなで活かせる!学校資料
学校資料活用ハンドブック』(村野正景・和崎光太郎編。非売品)がつけられた。
多様な学校資料(文書、写真、教科書、考古資料、教材教具、児童・生徒の作品
など)を様々な方々に活用していただくことを目指し、各々の専門分野をこえて、教
育現場や地域などで保存・活用を進める具体的な方法を、ハンドブックにまとめ
たものであるが、そのなかの八田友和・鈴木康二「学校資料を授業で使ってみよ
う!」で、学校資料を活用した授業の学習指導案が6点掲載されている。そのなか
の一つが小学校・総合的な学習の時間用の「学校博物館をつくろう!」と題した
指導案である。小学生たちが、校内の社会科教材資料室や校長室などで学校
資料を探し、見つけた資料がどんな資料であるかをインターネット・図書館・博物
館などを使って調べ、地域に話を聞きに行き、調べたことを壁新聞などにまとめ、
資料を展示する「学校博物館」をつくる
というものである。「面白そうだがこんなこと
ができるのだろうか?」と思ったが、すでに
各学校の学校博物館づくりを学芸員が
応援するという横浜市歴史博物館「博物
館でニュー支援事業」の事例として、羽
毛田智幸「学校資料を学校に展示しよ
う! 一学校内歴史資料室をつくる」を収
録されている。富岡のコラムは別として、
このハンドブックは、学校資料の新たな
活用に一石を投じるような内容が詰まっ
ているのではないかと感じている。興味
のある方には、お送りするので、どなたか
に批判的に検討していただけないだろう
か。(富岡)



『みんなで活かせる!学校資料』
表紙

はじめに …… 4

第1章

学校資料の魅力! …… 9

第1節 あなたの学校に、博物館はありますか? …… 10

第2節 授業を魅力的にする学校資料 …… 30

第3節 博物館に行ってみよう! …… 38

コラム1 教員を目指すみなさんへ
—大学資料館に行ってみよう! …… 48

第2章

こんなに広がる、学校資料の可能性 …… 53

第1節 学校資料を学校に展示しよう!
—学校内歴史資料室をつくる— …… 54

第2節 学校資料を授業で使ってみよう! …… 60

コラム2 調べ学習と学校資料 …… 76

コラム3 学校資料を使った「書道」の授業
—社会科だけじゃない— …… 80

第3節 学校資料を地域の施設で展示しよう! …… 82

第3章

学校資料の保存と整理 …… 103

第1節 何を保存・整理したらいいのか …… 104

第2節 どうやって保存・整理したらいいのか …… 110

コラム4 これからの学校資料
—学校統廃合と学校資料— …… 122

コラム5 自然災害と学校資料 …… 126

おわりに …… 130

参考・引用文献 …… 134

索引 …… 140

写真掲載や調査にご協力いただいた機関・方々 …… 144

学校資料保管場所リスト …… 146

編者・執筆者一覧 …… 150

連絡先 …… 150

『みんなで活かせる!学校資料』 目次

会員消息

本年3月中旬、富岡さんや加藤さん、金澤さんらと私(谷本)も資料委員を務めている、長野県松本市にある旧制高等学校記念館を年次集会もあって訪れました。集会のなかでは、記念館の所蔵する貴重な資料などのデジタル化の検討についても積極的な意見がありました。私個人の考えとしては、限られた予算等の諸事情もあるなかで、直ぐに多くの資料群のデジタル化はやはりむずかしいであろうと感じますので、たとえば所蔵する旧制高校関係の文献などの書誌データを、一先ず一般公開してはどうかと思いました。旧制高等学校記念館には、各旧制高等学校に関する文献や雑誌などが体系的にほぼ完備されていますので、それらの書誌データだけでも速やかに一般公開されれば、教育史にとどまらず学術研究上の意義はとても大きいものと考えます。たとえば、東京にある公益財団法人の野間教育研究所図書室が所蔵する「学校沿革史誌コレクション」(8366冊)などがよいお手本といえるかもしれません。この野間教育所のコレクションは、高等教育を始めとした学校教育機関を中心としたもので、野間教育研究所が現在に至るまで精力的に収集を続け、「今では消えてしまった学校の歴史もあり、大変貴重な資料となっています。このコレクションは、大学問題の研究者や学校関係者等に注目されており、利用者の最も多いもの」(野間教育研究所ホームページの解説)といわれます。(谷本)

上記の谷本さんの消息にもありますように、2019年8月17日(土)・18日(日)に開催される松本市の旧制高等学校記念館夏期教育セミナーでは、旧制高校資料の活用が内容の柱の一つになります。もう一つの柱は、各時期の思誠寮の寮生活を体験された方によるトークです。詳細は、次々号ぐらいにお知らせできると思いますが、もしご関心がありましたら、予定を空けていただけたらと思います。また、加藤雄大さんに告知記事を書いていただきましたように、6月2日の

ニューズレター・コロキウム(1)で私の研究をとりあげていただけることになりました。ご参加いただけたら、大変嬉しいです。(富岡)

先日、大阪市立大学の大学史資料室(杉本キャンパス)に行きました。同大学前身の大阪商科大学の大学予科に関する資料を閲覧させていただきました。この場をかりてお礼申し上げます。(山本剛)

今年度、日本アーカイブズ学会登録アーキビストの資格を取得しました。これは一旦取得すれば一生ものというわけではなく、実務経験や研究・研修によってポイントを貯めて、5年ごとに更新しないとけません。

今月は取材に行けず原稿を出せませんでした。来月からはまた取材を再開して、研究活動に勤しみたいと思います。(田中智子)

本ニューズレターPDFファイルをダウンロードして印刷される際、Adobe Reader などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用して A4 サイズ両面刷りに設定すれば A5 サイズの小冊子ができます。